

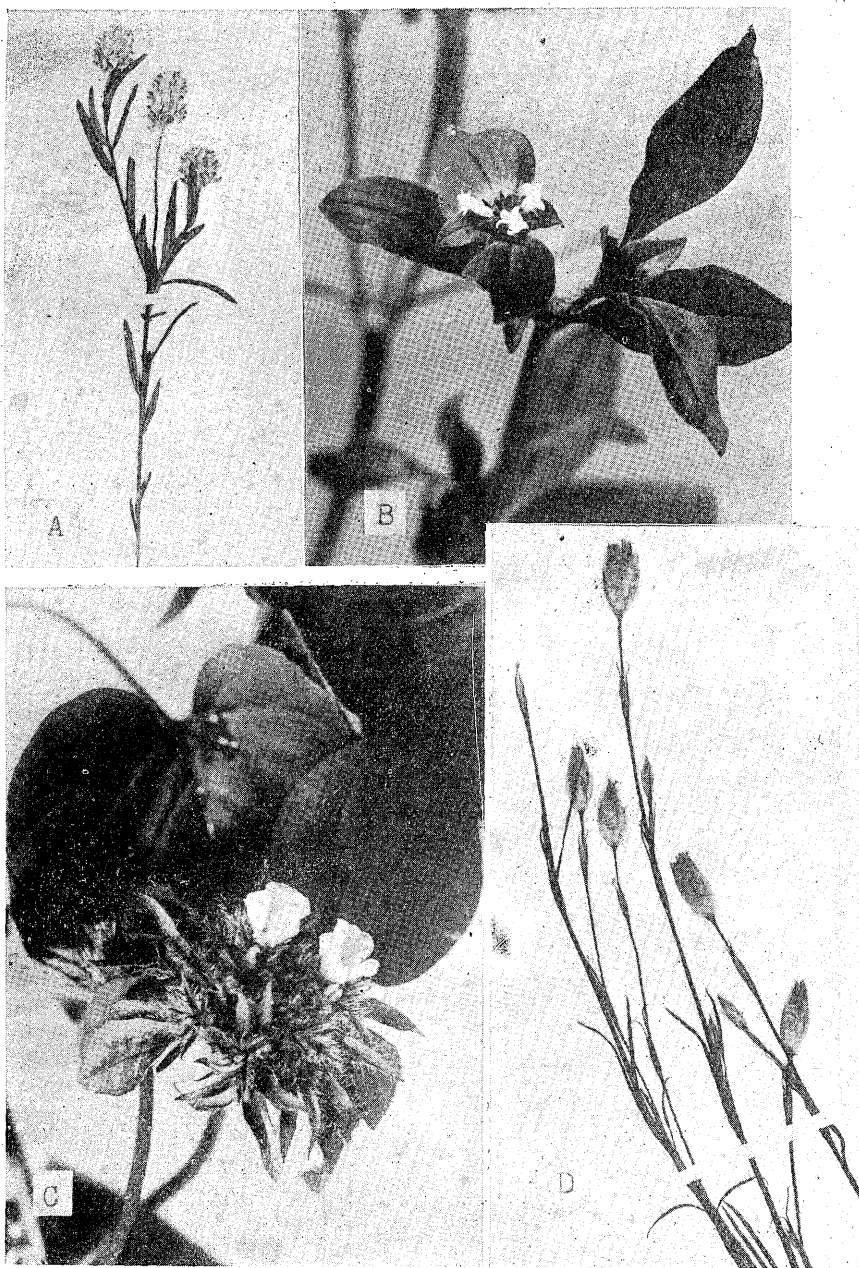
○スルガヘウタンボクについて (榎山泰一) Yasuichi MOMIYAMA: On *Lonicera Watanabeana* Makino.

南アルプスに、スルガヘウタンボク (*Lonicera Watanabeana* Mak. 1914) というものがある。エゾヘウタンボク (*L. Glehni* Fr. Schm. 1868) に近似の一種で、それよりは、ただ、葉が狭く毛が少いのが違いのように見える。もつとも、葉が狭くなると、それに伴つて、葉末がより長く漸尖し葉脚が尖るようになるけれども、多くの標本が集つて来ると、葉脚がくりこんでいて葉裏に毛の多い、エゾヘウタンボク類似の形なども出て来て (国立科学博物館標本 n. 79768)、葉形や毛の多少などで両種をわかつのはかなり困難になつて来る。一方、北地のエゾヘウタンボクにも葉形や毛の少いことにおいてスルガヘウタンボク類似の葉をもつものもあり、腺毛の多少なども区々であつて、その点でも両者の間に区別はつけがたい。果実は、スルガヘウタンボクでは、両岐するものが多く、果実上の萼も互に離在して側方を向いているというけれども、多くの筒体を見れば、果実癒合の程度も区々であつて、これを以てエゾヘウタンボクとの間に判然たる境を引くこともできない。スルガヘウタンボクで果実の高くまで癒合しているものも稀ではなく、萼も、それに伴つて、互に接近して上の方を向いて来るから、そうなれば、エゾヘウタンボク類似の果形にもなつてしまひ、一方、エゾヘウタンボクで果実の分離するものもあるのを見れば、果実の特徴によつて両種をわかつことも不可能である。スルガヘウタンボクの花はまだ見得ないが、苞の長短も、エゾヘウタンボクでは、変るし、小苞の有無、大小、癒合の程度なども区別の不明瞭な場合が多い。結局、スルガヘウタンボクをエゾヘウタンボクから種別するに足る、よい特徴はどこにも見出しがたいということになる。そこで、これを別種とするよりは同種中のものとするのが妥当なように考えられる。思うに、スルガヘウタンボクは、いわゆる残存植物のひとつであつて、それは、そのかみ、北地から本州中部山地にまでひろく分布していたエゾヘウタンボクの、いわば、断片のようなものに他ならないといひ得るかと思う。

○新歸化植物 (奥山春季) Shunki OKUYAMA: Some naturalized plants to Japan.

コモチナデシコ (*Dianthus prolifer* L.) 図. D.

昭和28年3月博物館の腊葉展の折、滋賀県の橋本忠太郎氏より送られたナデシコの一品があつたが、最近種名をつきとめる事が出来た。同氏のラベルのノートには産地として近江国蒲生郡鎌掛村東出、昭和27年5月5日採集とあり、“鎌掛村瀬川喜久次氏宅の畑に出来たもので恐らく鶏の餌に混じて来たものと思われる帰化植物、花は桃色で甚だ小さい”とあつた。標本は開花中のものであるが一見花卉が無い様に見える。乾膜質で長さ15~18mmある筒状の萼の先端から僅かに出ているだけで先端が浅く切れこんでいる。原産はヨーロッパでアメリカには古くから帰化しており日本へは最近入つて来る他の帰化植物と同様アメリカ経由のものと考えられる。博物館には明治40年



A. *Polygala sanguinea* L. カンザシヒメヘギ E. *Richardia scabra* L. ヘシカグサモドキ
 C. *Jacquemontia tamnifolia* Choisy オキナアサガホ D. *Dianthus prolifer* L. コモチナデシコ

(1907) 5月31日東京高等師範学校栽培採集者根本莞爾という標本があつて1914年出版の東京帝室博物館天産課、日本植物乾腊標本目録 275 頁でコモチナデシコと新称された *Dianthus prolifer* であつた。文献によれば1年草の由。

カンザシヒメハギ (新称) (*Polygala sanguinea* L.) 図. A.

これは1952年9月27日博物館の神津牧場荒船山採集会の折見付けたもので牧場から初谷鉱泉へぬける途中で、ある区域にかなり生えており紅紫色の花が盛りで一同を喜ばせた。帰京後しらべて見た結果北米原産のヒメハギ科の *Polygala sanguinea* だつたが、まだ公表してなかつたので此処に紹介しておく事にした。文献によれば相当大さくなるらしいが吾々の見たものは高さ15cm許りのもので莖には稜があり上部分枝し枝の先端に略々頭状に密に花が重なつた穂状花序をつけ径1cmある。花弁状の2枚の側萼片は略々卵形で長さ5mm巾3mm許、葉は線形で長さ2cm巾2mm許の小草である。花序からカンザシ(簪)を連想し新和名を選んだ。

アメリカクサネム (新称) (*Aeschynomene virginica* B. S. P.)

日本のクサネムに非常によく似たもので或は各地に広まつているらしくも思われる。全株(葉を除き)細まかないほの刺の先端部から長い毛が出て居り特に若い莢や梢の部分に著しい、花は旗弁が特に褐紫色が濃く翼弁は色稍々淡く竜骨弁が先の方に着色があるが下半部は黄色で一見褐黄色に見える。手をふれば3秒位で葉をたたむとの事(採集者による)。以上の様なクサネムが昨年10月出口長男氏によつて横浜の初音ヶ丘の米屋のゴミ棄場から採集された。在来のクサネムとは非常によく似たものではあるが帰化品と判断上記の学名に当てておいた。採集家の注意をのぞむ。上記学名に当るものは北米の原産である。

ハシカグサモドキ (新称) (*Richardia scabra* L.) 図. B.

一見ハシカグサに似ているが本種は花冠の筒部が長く5mmを越し裂片は通常6裂し萼も同じく6裂するのでハシカグサの花冠の筒部が短かく萼も共に4裂する点ですぐ区別出来る。我邦にははじめての属である。1年草で夏から秋にかけて白花を開く。私の見た生品は津村葉草園に他の種子に混入して入来1953年9月に開花したもので非常に発育が良好であつたから将来は帰化植物として各地に見られる様になる可能性が大きいと想像された。或はハシカグサとして見のがされていて相当広まつている事も考えられる。同好諸氏の注意を望む。北米原産。

オキナアサガホ (*Jacquemontia tamnifolia* Choisy) 図. C.

本種は既に浅井康宏君が1950年及び1952年に神奈川県藤沢市の片瀬で採集され標本もつくられていたのであるが種名の同定が不可能のものであつた。1953年9月19日ハシカグサモドキと一諸に橋本武次郎君が津村葉草園に他の種子に混入して入つて来たものを栽培した美事な生品を持参された事から久内氏と共に Britton and Brown の北米植物図鑑(1952年の新版)をひもといて上記学名をつきとめたものである。和名は

浅井君の命名。花は長梗の先端に頭状に多数集まり葉状の苞があり披針状鉞形の萼の先端には白色の長毛がある。花は径 1 cm 余、青色で美しく一寸観賞用としても悪くない。熱帯アメリカの原産。

(附 記)

ムシトリマンテマ (*Silene antirrhina* L.) の開花時間について。

本誌 26 巻第 8 号 (1951 年) に報告したものであるが当時の採集者高橋万之丞氏が東京に移植観察した結果を示されたが、それによると日本に入つたものは明らかに花卉があり、5 月 13 日 (1953 年) に咲きはじめ約 10 日間花が見られたが、夕刻に開花、翌日の午前 9 時頃に萎むという事であつた。

○マツバランとナギの新産地 (日野巖・岡国夫) Iwao HINO and Kunio OKA:

New localities of *Psilotum nudum* and *Podocarpus Nagi*.

正宗博士はマツバランを能登北端に発見し、本誌 27: 78 に本種の邦内における詳細な分布図を掲載された。これには中国地方が空白となつていたので、ここに周防国大島郡白木村の下田八幡宮及び佐波郡和田村を加える。何れも、老木 (前者はホルトノキ、後者はカエデ) の樹上に僅かに着生している。

ナギは周防国小郡町岩屋が自生北限であり、又、本土に於ける唯一の野生地として天然記念物に指定されているが、我々は今回上記の下田八幡宮社叢にその野生を認めた。この社叢はスダジイ優占種群落で、所によつてはクロガネモチが優勢を示す部分もある。林床にはイズセンリョウ、アリドウシ、テイカカズラが多く、ノシラン、マンリョウ、ホソバカナワラビも多い。ナギは斯様な林床植物の密生する中に高さ 1 m のものが 1 本生えている。附近には親木が少くとも雌雄 2 本はあつたものと想像されるが、最近社叢が大半休採されたためか、見当らなくなつた。(山口大学農学部応用植物学研究室)

□知里真志保: 分類アイヌ語辞典第一巻植物編 日本常民文化研究所彙報第 64 号東京 (昭和 28 年 4 月) アイヌ語に於ける植物名は従来屢々研究し集録された。本誌 24 巻の宮部博士の論文もその一つである。知里氏は既往のものを遙かに凌ぐ多数の植物について、各地で親しく採集し、それを充分にアイヌの生活の中に溶け込ませて解説をしている。エゾヨモギからアオミドロまで 472 種の植物が登場するが、こんなに多数の植物がアイヌの生活に関連していたのかと驚く。更に重大なことはアイヌは植物の利用部分、即ち莖、葉、根、球根、花、果実等の部分に対して夫々名をつけているが、植物そのものには決して名を持たぬという事実に基づいて、従来の解説の批判をしつつ詳細に述べていることである。発音も二種の記号を用いてアクセント迄写しており、植物以外の関係語彙と解説や索引をも添える。一部に不親切なところ、たとえばグイマツのアイヌ語 kuy について何等説明がないなどのこともあるが、アイヌ語植物名の決定版とし